

序論: 12:31「はるかにまさる道」とは何か

- 前回(Iコリント12章後半)の振り返り: 賜物の違いは分裂の理由ではなく、互いに配慮し合い、共に苦しみ・共に喜び、キリストのからだを建て上げるため。
 - コリント教会の問題:
 - 目立つ賜物がない者の劣等感／目立つ賜物がある者の優越感。
 - からだのたとえで、見下しも自己否定も退けた。
 - しかし12:31で「よりすぐれた賜物」「はるかにまさる道」と言うのはなぜか?
 - 答え: 賜物の価値を生かす鍵は“愛”であり、愛こそがまさる道だから。
-

I. 愛がないと、すべてが無意味(13:1-3)

- 異言・預言・知識・強い信仰・献身や犠牲さえも、愛がなければ空虚。
 - 「騒がしいどら／うるさいシンバル」=響きはあっても益がない。
 - 「無に等しい」「何の役にも立たない」=賜物が本来の力を発揮できない。
 - 結論: 賜物は“愛”を動力源として用いられるときに生きる。
-

II. 愛とは何か(13:4-7)

1) 愛の肯定的な行動(13:4 前半)

- 「寛容」=怒りを遅くする(相手の失敗に即断で怒りを爆発させない)。
- 「親切」=相手の益となることを積極的に行う。

2) 愛の否定的な面(13:4 後半-5)

- ねたみ／自慢／高慢／無礼／自己利益／苛立ち／悪を心に留める…
- 共通点:
 - 自分を優位に置きたい心を抑える。
 - 相手を見下して責め続けたい思いを手放す。
- 補助聖句: ローマ 12:10「互いに相手をすぐれた者として尊敬し合いなさい。」

3) 愛の価値観(13:6)

- ・ 愛は“不正に無関心”ではない。
- ・ 「不正を喜ばず、真理を喜ぶ」=相手が真理に至ることを願い、そのために仕える。
- ・ 怒りを遅くし、悪を心に留めない理由:悔い改めへの猶予とチャンスを与えるため。

4) 愛の総括(13:7)

- ・ 「耐える／信じる／望む／忍ぶ」=相手が真理へ向かうことを支える愛の粘り強さ。
 - ・ 愛は感情の揺れではなく、意志をもって仕える決心と行動。
-

III. 永遠の価値がある一番のものは愛(13:8-13)

- ・ 愛は絶えないが、預言・異言・知識は「すたれる／やむ」。
 - ・ 理由:今の賜物は「部分的」。完全が来ると部分は終わる(13:9-10)。
 - ・ たとえ(13:11):幼子→大人(補助輪の例)
 - 成長・完成の段階では、部分的な助けは役目を終える。
 - ・ 「完全」がいつかについては解釈が分かれるが、少なくとも新天新地では直接の臨在の中で不要になる。
 - ・ 結論(13:13):いつまでも残るのは信仰・希望・愛。最大は愛。
-

結論:2026年、教会が握りしめるべき道

- ・ 12章が示す教会形成:違いを受け入れ、共に苦しみ・共に喜び、支え合い、キリストのからだを建て上げる。
- ・ 13章が示す核心:愛に基づいて賜物を用いること。
- ・ 具体的勧め:
 - 怒りを遅くし、相手の益を求めて実行する。
 - 自分を上に置かず、相手を尊び、愛をもって仕える教会となる。
- ・ それは、私たちを救うために歩まれた【主】イエス・キリストの道に従うことであり、**「はるかにまさる道」**である。